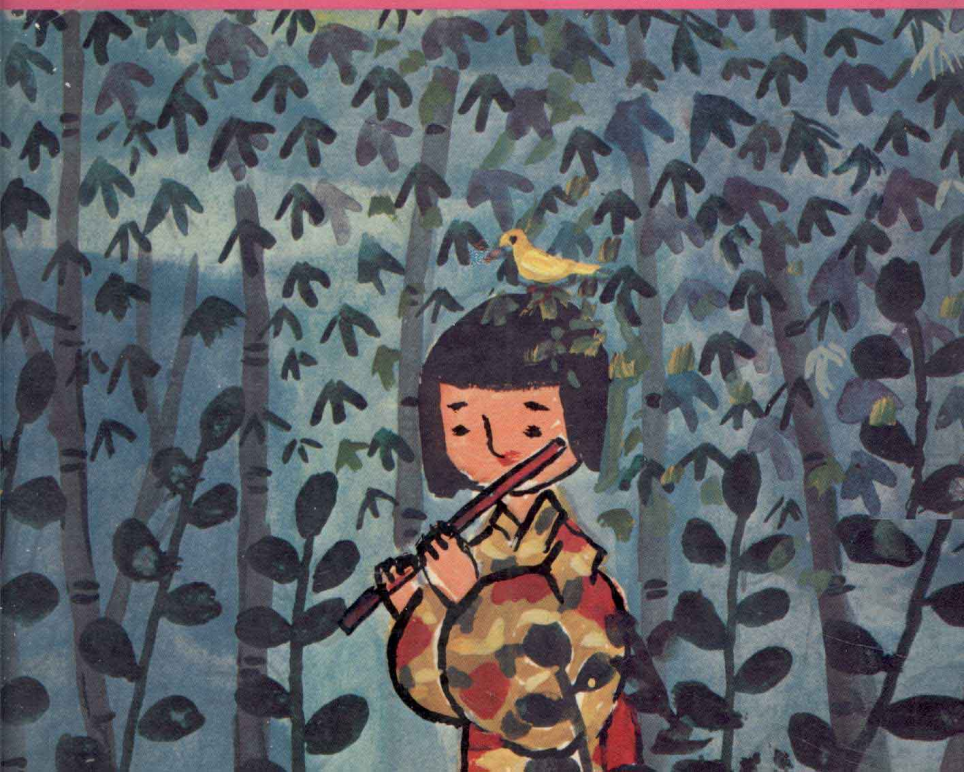


メルヘン動物園 1

赤鼻のライオン
ウグイスの笛・他

石濱恒夫 作
谷内六郎 絵





石濱恒夫（いしはま・つねお）

●大正十二年大阪生れ 東大文学部卒

●作家・詩人 文芸家協会・ペンクラブ・日本
外洋帆走協会 会員

●(著書)

童話集「日本アンデルセン」小説「流転上
下」「遠い星」詩集「地球上自由人」ほか

●(作詞)

「こいさんのラブコール」「硝子のジョニー」
「EXPO70 開会式歌」ほか

●(冒険歴)

日本タヒチ太平洋ヨット航海・エベレスト
登攀隊基地トレッキング・日本サンフラン
シスコ北太平洋ヨット横断 など

●紺綬褒章／川端康成ノーベル賞授賞式随
行／谷内六郎氏とは二十年來の知己

メルヘン動物園 1

著者 石濱恒夫

〈検印省略〉

昭和五十二年七月一日初版発行

発行人 清都松夫

発行所 株式会社 日本教文社

100 東京都港区赤坂九一六―四四
電話東京〇三四〇―一九二一（代）
振替 東京 四一五五五一九番
三晃印刷・凸版製本

落丁・乱丁はお取替えます

© Tsuneo Ishihama 1977, Printed in Japan

8093-7077-5809

はじめに ————メルヘン動物園について

ほとんどのひとが、だれもが知ってはいないでしょう。いいえ、この動物園は三十ねんちかいまえ、しばらく、ほんの数ねんばかりのあいだ、いくどか公開されたことがありましたが、そのあと、わたしの胸の奥底ふかくに、そっと閉園されたまま、いわば、わたしの秘密の花園、いや、秘密の動物園だったのです。はい、わたしですか？ わたしは、もちろん、そのメルヘン動物園園長です。

閉園したあとも、だから、わたしはいつもこれらの動物たちといっしょでした。

そうですね、まるでサーカス団の一座のように、日本だけではなく、遠く世界の旅へもそっと秘密のまま連れてゆきました。北欧の都ストックホルムや、ロンドン、パリ、ローマ……とうとう南インドやネパール、タイやホンコン、タイワン、それからヒマラヤのエベレスト山のすぐふもとの氷河のうえや、また、日本から南太平洋のタヒチ島までと、日本からサンフランシスコまでの太平洋横断の、ヨットによるふたつのながい航海にも、わたしとともに乗せてやりました。

ソートレーク・シティ、デンバー、セント・ルイス、ナイヤガラ、ニュー・ポート、ニュー・ヨーク……アメリカ横断のバス旅行の途中では、いくつもの峠をこえて、ロッキーマウンテンの恐竜の化石がでる村までも、いっしょにいったものです。

けれども、わたしひとりの秘密の動物園のことですから、だれも気がつかずに知らなかっただけのはなしです。そら、アメリカのお芝居にでてる、ガラス細工のちっちゃな動物園のようにね。

こんどの夏も、アメリカからヨーロッパへの大西洋横断の旅にも、中学二年生の娘の紅子の遊び相手に、乗せてゆくつもりでいたのですが、せんじつ、思いがけずひとりの青年がたずねてきて、もう一ど、ぜひ公開するようにと、しきりに熱心にすすめてくれました。

青年は小学生だった少年のころ、一ど、この動物園をのぞき見たことがあったのです。そのころは、閉園しはじめていたところで、ABC、NJB（MBS）、NHK（JOBK）……など、ラジオの電波でしか、この動物たちのほとんどは紹介されてはいませんでした。

わたしも、思いだしました。たしか、見ず知らずのわたしをたずねて、お母さんに連れられてやってきたその少年に、ラジオのその紹介文の台本を貸してあげて、ひとわたり、ざっとこの動物園のなかを案内したことを。

その少年が、ある出版会社につとめる、りっぱな青年に成長していて、ふいにあらわれて公開をすすめたわけです。

いささかのためらいはありましたが、それだけでも、ことわる理由はなにもありません。動物たちにも相談してみましたが、ひさかたぶりの公開に、かえってにぎやかになるだろうと、よろこんでいるようです。

でも、はずかしがり屋の動物たちもいることから、約半数だけにします。いえ、べつに変わった動物たちはいません。火星人や、こびとや鬼婆あ(第2集)や、ふろくにボール紙の王さま(第3集)もでてきたりはしますが、ただ、これらの動物たちは人間とおなじように、いいえ、あるいはそれいじうに素直な、やさしい心のもちぬしたちばかりなのです。

みかたをかえれば、あるいはまた、ナンセンスないわゆる落ちこぼれの動物たちばかりであるかもしれません。

それでもよかったら、どうぞ、いらつしやい、メルヘン動物園へ。古い児童雑誌でなら、赤とんぼ、青い鳥、新児童文学、母の友、などでお会いになったことのある動物たちも、まじっておりますよ。

入場料はいただきますが、ご遠慮はいりません。それから、動物園のことですから、入場者のお客さまも、年齢制限はございません。赤んぼうから百歳のご老人まで——そうですね、番茶でショートケーキでも食べながら、どうぞごゆっくりと、見物なすってください。

赤鼻のライオン 7

ウグイスの笛 24

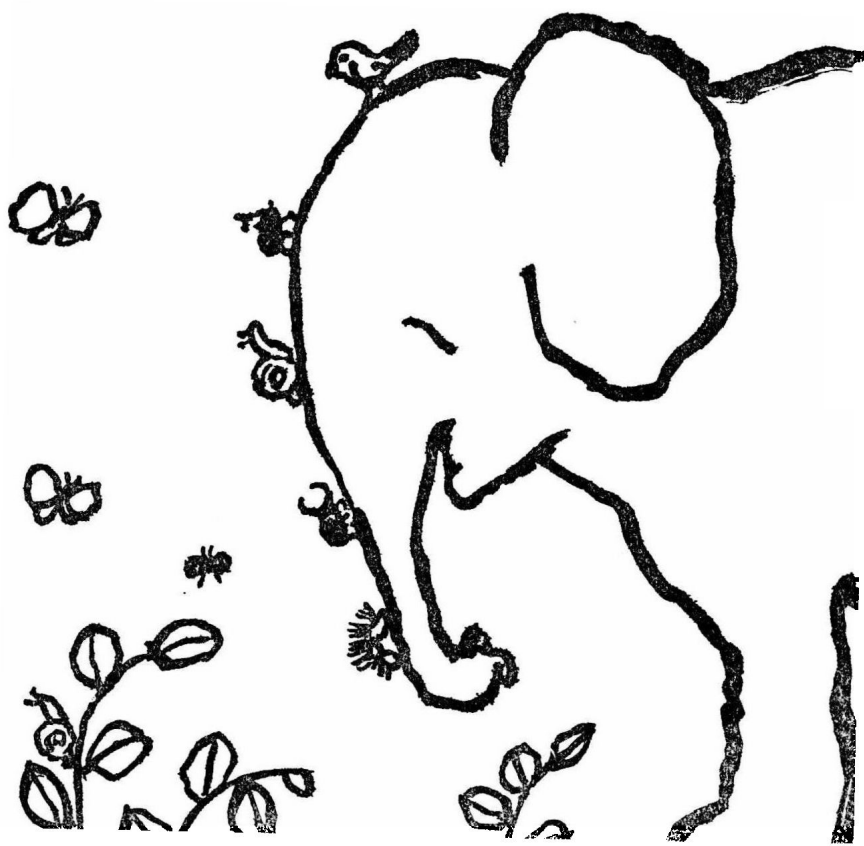
大酒のみのワニ 39

ペンギン鳥の旅 54

カラスと虹 72

ひとりぼっちのヒョウ 83

ワニの子マーファイ 95



メルヘン動物園 1

ポップさんの山高帽子 126

さんびきのサル 144

動物園のメルヘンについて (安岡章太郎) 161



● 第一話
赤鼻のライオン



流動食で満足している気のよい
百獣の王の勇敢なものがたり

ある夜、赤鼻のライオンは、ジャングルをぬけ、草原をこえ、またジャングルをぬけて、砂漠へ泣きにゆきました。

飢えて、やせこけて、よろよろと、こまかにくずれる砂をふみしめながら、首と尾とをたれ、だれしられずにせいっぱい、胸の奥底からすすり泣きました。砂漠の夜空は、赤やみどりや白い星が惜しみなくぶちまけられて、低い、かぼそくどがった三日月でありました。もちろん、ライオンは百獣の王とされていますし、事実また、そうでもありましよう。

けれども、たった一びきだけ例外がありました。赤鼻のライオンです。鼻のあたまに、みにくいまっ赤なぶよぶよの瘤がふたつ、左右からまるでお腕をかぶせたようにあがって、とてもおかしい顔だから、そんなふ

うに、みんなから呼ばれているライオンです。

彼だって、まだ、そんな滑稽な瘤なんかなかったころは、たしかに百獣の王の一びきであり、また、ジャングルのはずれの草原のまさしく支配者でもありました。草原をみおろす岩山のうえにたつて、ふさふさとした金いろのたてがみをふるわせ、ひと声高く吠えようものなら、草原やそのまわりのジャングルのほとんどすべての獣たちは、あわてて罅へかけもどつて息をひそめ、かさりと音をつたえず、吹きわたつてゆく風や、かさなりあつた木や草の葉ずれのささやきや、小川の流れのひびきばかりが、熱帯の太陽の輝きのなかでささやきや、さらさらときこえるほど、しずかな世界になったものでした。

おしゃべりなインコたちでさえ、しんとそのまま木のうえの枝で、まるで剝製の小鳥たちになつたかのように、かたくなり、だまりこみます。その高らかな吠え声は、さア、これからおれさまが狩りにおでました、

注意するがいい！ という誇らかなあいずなのです。

それから、ひとはねすると縦横に草原やジャングルを身がるにかけめぐって、じゅうぶん、おもうぞんぶん獲物をもとめて、満足な狩りをしました。

あの狂暴な犀でさえ、いくどか倒したことができました。

それが、ほんの、すみかである岩山の洞穴のまえで、ながながと寝そべって、平和なほんのちよつとした昼寝をこころみていた、最中のことだったのです。

一ぴきのアブがとんできて、鼻のあたまへとまったのです。なにかご馳走のあまり汁が、ちょっぴりはねて、ついていたのかもしれない。そしてその味が、アブの期待にはんして、ひどくまずかったのかもしれない。アブには、なんの悪意もなかったのですが、たぶんその腹だちま

ぎれに、ライオンの鼻のあたまをりょうがわから、つまり右がわからと左がわからと二カ所、毒のある口でチクリチクリとさして、またどこかへとんでいってしまったのです。

かわいそうに、そのときから、あわれな百獣の王、赤鼻のライオンになったのでした。

もう、そうっと、そろそろとしか歩けません。いそいだり、走ろうとすると、はれあがったそのふたつの瘤にひびいて、いたくていたくて堪えられないのです。小川の水でひやしたり、いろんな薬草の汁をつけてみたりしましたが、ダメでありました。

二どと、高らかに吠えることも、草原やジャングルを身がるにかけまわって狩りすることも、できなくなり、瘤はいつまでもいっこうに、癒りそうにはありませんでした。

「天罰さ」

そうになると、草原やジャングルの獣たちは、それぞれくちぐちに勝手なことを、わざときこえよがしにいうのでした。

「あいつの一番の好物だった縞馬に、後足で蹴ってもらえば、たちまちへこんでしまうのにさ」

「いいや、それより、沼へ水をのみにいってさ、ワニの婆さんにかんでもらえば、かんたんにとれるさ」

おちようし者のマントヒヒなぞは、熟していない青い木の実をちぎってき
ては、瘤をめぐらしてぶつけるのでした。

いつも他人の夢ばかりをたべて、ぼんやりと夢ばかりをみている、おとなしいバクだけが、そつとなぐさめておしえてくれました。

「砂漠へいって、砂漠でひとりぼっちで眠りながら修行している、お坊さんにはたずねてごらん。なんでも、えらいお坊さんらしいから、きつと、いい治療法をしってるよ」

いいえ、そのために砂漠へきたものではありませんでした。さきほどいったように、赤鼻のライオンは、だれしられずにひとりしずかに泣くために、やってきたのです。

いくら赤鼻でも、百獣ひやくじゆうの王であつたものが、めそめそと泣いているところなんか、ほかの獣けものたちにもられたくはありませんものね。

まったく、夜空の美しい、しずかな晩ばんでありました。涙なみだは心おきなく、砂にすいこまれて、砂漠の底ふかく地中を流れている川のなかへ、こぼれ落ちてゆきました。

「だれかね？ なに泣いているのかね」

いきなり、声をかけた者がありました。星と三日月明りにすかせてみると、すぐ近くの砂丘さまゆりのかげに、五色のワンピースを身にまとい、まるで女の子のようなやわらかなが金髪きんぱつの、黒んぼの老人がひとり横たわっ

て、眠りつづけているのでありました。

枕もとには、一ちょうのマンドリンと、水のはいつている透明なガラスの壺が、おいてありました。ああ、これがバクのいったお坊さんだな、と、すぐにわかりました。

眠ったままで、寝言のように、そのお坊さんはいうのです。

「赤鼻のライオンだね。みにくい瘤のことを気にして、おまえは泣いているのだね」

ライオンは、こたえました。

「いいえ、そうじゃア、ないんです。わたしは、おなかがへって、へって、ひもじくていまにも死にそうなんです」

実際、鼻がはれあがって、狩りができなくなつてからというもの、あいにく、まだひとりもののライオンだったし、なにひとつたべてはいなかつたのです。

「そんなにひもじければ、わたしをたべるがいい」